

♪♪♪ いい歌、いい町、いい自然 ♪♪♪

No. 503

2004. DEC

広報

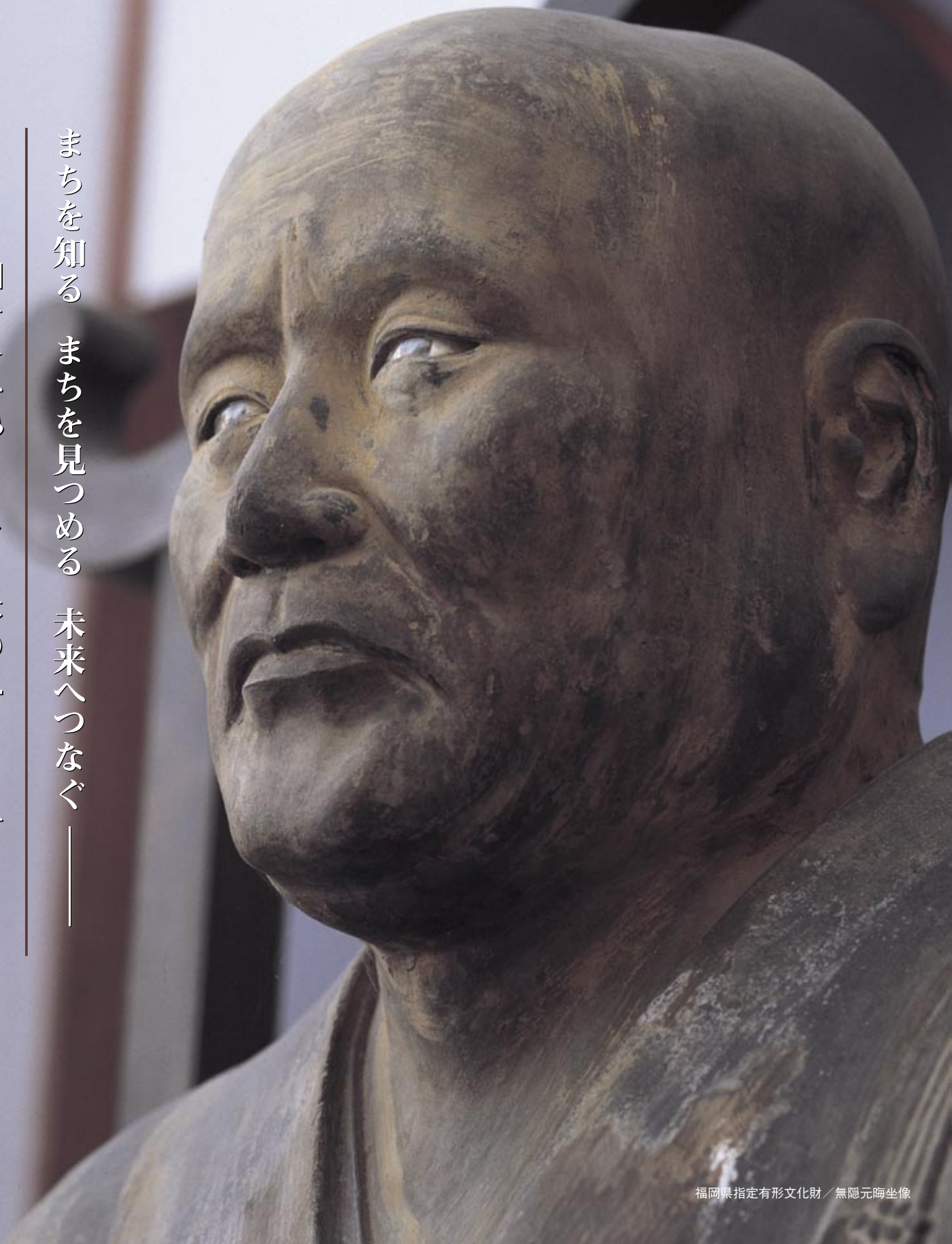
あかいけ

12

○ 特集

「文化の回廊」に行く

まちを知る まちを見つめる 未来へつなぐ――



さあ、文化回廊の扉を開こう

この町には、誇るべき文化がある。

次の百年に継ぎたい宝物がある。

まちを知り、まちを見つめると

そこに何かが見えてくる。

ここは私たちのふるさと赤池町。

赤池らしさに気づく

「文化の回廊」を旅してみよう。



P9



P21



P24

12 広報
あかいけ
No.503/2004, December

← 重厚な山門の奥に静心池をはさんで本堂が見える。室町時代に足利尊氏・直義によって安国寺に指定された興国寺。今に伝わる寺宝は、まちが誇る宝である。
(写真：天目山興国寺山門と横山哲志住職)

まずは「まちの正倉院」興国寺へ ——

● CONTENTS ・ 目次 特編「文化の回廊を歩く」

第一章 発見・まちの至宝物語	4
興国寺開山 無隠元晦の志	5
古刹に宿る尊氏伝説	6
よみがえった千手観音	8
東光寺焼仏の残像	10
第二章 発信・やきものの文化新時代	11
上野と小石原	12
「和みのかたち」という提案	14
陶の里で出会う創造と感動	16
やきものをもっと身近に	18
進化する上野の遺伝子	20
第三章 発展・福智に迫る	22
知られざる文化探訪	23
『折躑躅』桃源の誘い	24
母樹と向き合う	26
レッドデータにある生命たち	28
懐に抱かれて	30
文化の回廊探訪マップ	32

まちの至宝物語

はるか遠い昔から、このまちには時間^{とき}が流れている。
その中で育^{はぐく}まれた文化は、歴史として刻まれ、ごくわずかが形となり、今に残っている。
歴史の証人である文化財、まちの宝に秘められた物語を探ってみよう…

興国寺開山、無隠元晦の志^{こう いく じ かい ざん む いん げん かい こころざし}

【大海を越えた高僧が今に語りかけるもの】

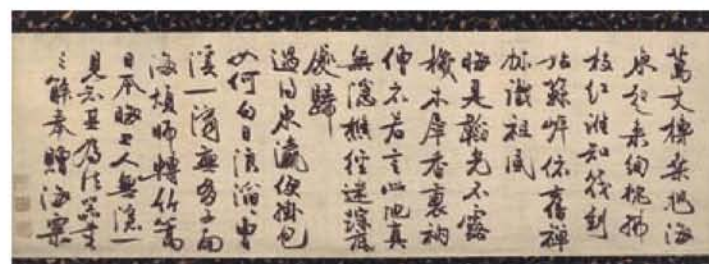
今にも動き出しそうである。その骨肉の像は、意志あるかのごとく、見る者に迫ってくる。この世の全てを見据えたように空をにらむ目、への字に結んだ唇：生前の姿を彷彿とさせる像には霊気すら漂っていた。「無隠元晦坐像」。

南北朝時代の傑作として高い肖像彫刻である。興国寺開山と仰がれる無隠元晦^{むいんげんかい}禪師は、弘安6年（1283年）に田川弓削^{ゆきせき}で生まれたと伝えられている。時は、動乱の絶えない鎌倉時代の末期。仏の道を歩み、博多聖福寺で僧となつた元晦禪師は、常に高い志を持っていた。その意志は、いつしか禪師を文化と仏教の中心、元の国へと導いていく…

難破する確率が極めて高い、生死をかけた渡航に身あずけた元晦禪師。27歳のときに豊後の守護・大友貞宗^{おおくみさだむね}の支援を受け、渡元したとされている。万里の荒波を越え、元の国にたどり着いた禪師は、中国大陸の広大な風土や華麗な文化に接した。やがて、天目山の名僧・中峰明本^{ちゅうけうめいほん}に師事し、厳しい修行を重ねる。めきめ



↑興国寺の開山堂に安置されている無隠元晦坐像。かつて地元では「興国寺の黒仏（くろぼとけ）様」と呼ばれ、夜になるとお寺の周囲を見回っていたという逸話が残っている。昭和31年に福岡県有形文化財に指定された。



↑与無隠元晦詩（むいんげんかいにあたうし）／東京国立博物館に所蔵されている国宝。元の文人、馮子振（ふうししん）が、無隠元晦禪師に七言絶句3首を揮毫して贈ったもの。この他にも元晦禪師に与えた語が伝えられている。馮子振がいかに禪師を重んじ、また禪師が元の国で名を馳せていたかがうかがえる。（写真／東京国立博物館提供）

水漏のはめ込まれた目が生彩を際立たせる「無隠元晦坐像」の頭部側面

↓威風堂々という言葉がふさわしい本堂。赤池町出身の童謡作曲家河村光陽は、この寺を思い浮かべ「山寺」を作曲したと言われている。



「今宵一夜に咲かば咲け 咲かずば咲くな 世も墨染の桜かな」



→尊氏が武運を占い、自ら植えたと伝えられている「墨染の桜」。世代交代を経て、今は若い木が植えられている。

興国寺の境内に立つ。ここだけが南北朝時代の雰囲気を残したまま時を止めているかのようだ。福智山の裾野と調和する姿は、美しさと強さを兼ね備えている。かつては、細く延びた上り坂の参道が、ここに至る唯一の道だった。鐘楼は見張り台、山門前の石垣が外濠、境内の池は内濠の役目をする。三方を山に囲まれ、城郭の配置がなされている。

室町幕府初代将軍・足利尊氏と弟の直義は、国家安泰の祈願と戦死者供養のため、全国66か国に安国寺を設置した。その多くは交通の要衝地にあり、幕府の前進的な拠点として軍略上の一面も強かった。豊前安国寺に指定された興国寺もまた、その面影を色濃く残している。

尊氏にまつわる言い伝えは枚挙にいとまがない興国寺。京都占領をめぐる戦に敗走し、九州へ落ち延びた尊氏の伝説が残されている。その一つが「墨染の桜」である。ここで再起を図った尊氏は、つぼみのついた桜の枝を切り、逆さに地中に挿して今後の戦運を占った。

「今宵一夜に咲かば咲け 咲かずば咲くな 世も墨染の桜かな」。

そして、桜は一夜にして咲いた。勝利を確信した尊氏は、勝ち戦を収めながら京へ東上、征夷大將軍となり室町幕府を開いた。というロマンに満ちた伝説だ。

尊氏が再度奮起し、覇者となった出発点とも言えるこのエピソードは、多くの人の心を打った。興国寺文書には細川幽斎、小笠原忠真の詠歌が残されている。歴代藩主が拝した「墨染の桜」である。

古刹に宿る尊氏伝説

【南北朝のロマンに想いを馳せる】



←夕暮れにたたずむ興国寺。写真右に中世の城跡と伝わる観音寺山、左がラントウと呼ばれる丘陵地、背後に深い林がある。興国寺の地形はまさに「自然の要塞」となっている。



【足利尊氏】室町幕府初代将軍。国家安泰祈願のため、弟・直義とともに全国66か所に安国寺を設置した。無隠元庵禅師との親交も厚かったと伝えられ、数々の尊氏伝説が残されている。(画像／京都国立博物館提供)



【細川幽斎（藤孝）】安土桃山時代の武将。豊前藩主・細川忠興の父。丹後田辺城主。学問、芸能の奥義を極め、当代随一の文人として名高い。子・忠興は、興国寺を藩内諸刹の上位に置いた。(画像／南禅寺天授庵提供)



【小笠原忠真】豊前小笠原藩の初代藩主。興国寺の瓦や仏具に小笠原家の家紋が随所に見られるように、歴代藩主はこの寺を手厚く保護してきた。(画像／広寿山福聚寺所有／北九州市立自然史・歴史博物館提供)

「もうこの人もかくやと身を捨て花にこころは墨染の袖」

「すみ染のおしへをうけてさく花の心はおなしふか草の露」



←足利尊氏寄進状などを収めた興国寺文書。安国寺に関する最も古い文書があり、全国的にみても貴重な資料。2巻に仕立てられている。昭和31年、福岡県有形文化財指定。



写真右／尊氏が身を隠したといわれる隠れ穴。写真左／尊氏が乗った馬のひづめ跡といわれる馬蹄（ばてい）石。興国寺に今も語り継がれる興味深い伝説だ。

時代の装いを新たに
開かれた寺として
ここにあり続ける



写真左から▶天目山興国寺の横山哲志住職▶「護国道場」と掲げられた観音堂内部。中央に千手観音が坐し、普段は厨子（ずし）が閉じられている▶「観音の日」にあたる毎月17日には坐禅会が開かれる。一般のご開帳は年に一度、11月17日の「観音大祭」のみ▶静かに自分を見つめる坐禅会はだれでも申し込むことができる。◎興国寺 Tel. 28-3081



←11月17日に行われた興国寺の「観音大祭」。千手観音像修復後、初の開催となった。赤地に白抜き祈願旗が、参道入り口から観音堂まで列をなして連なった。

よみがえった千手観音

【寺宝と歩み時を刻む興国寺】

その姿を拝めるのは大祭を行う11月17日、年に一度のご開帳の日だけだ。興国寺の建物の中で最も歴史ある観音堂、その奥に千手観音像は坐している。華麗な光背を備え、重層な蓮華座の上から拝する人をやさしく包み込む。

「尊氏の守り本尊」との説もある千手観音像は、開山である無隠元庵禪師が京都から招いたものと伝えられる。台座の中から発見された古文書には、天明2年（1782年）に田川郡をこえた3百人におよぶ寄付を募り、修理したことが記されていた。

近年、傷みが著しかった千手観音像は、昨年、篤志家の寄付により2021年ぶりに修復された。その作業は千手観音の故郷、京都で約一年半におよんだ。そして今年、修復後初となる「観音大祭」が、11月17日に盛大に行われたのである。興国寺の横山哲志住職は言う。

「この寺に伝わる寺宝や伝説は、それぞれがメッセージを発しています。ぜひ若い世代のみなさんにこれらを受けとめていただきたい。郷土への誇りや高い志を持って欲しいものです」。

町活性化を担う重要な観光資源としての一面を持つ興国寺。昨年7月の豪雨被害を乗り越えた今年、この観音大祭を機に「開かれた寺」として多くの人を招きたいと横山住職は語る。

長い歴史の中で、各時代の装いを重ねてきた興国寺は、よみがえった千手観音とともに、寺史の厚みをいっそう増していくのだ。

観音堂の奥に浮かび上がった千手観音像。慈悲深く、やさしい顔立ちをしている。この像を拝しながら元庵禪師が国家安泰の想いをめぐらせていたのかもしれない。



第二章 ● 発信

やきものの文化新時代

伝統文化にふるさとあり。伝統美には豊かな郷土色が息づいている。

赤池町の伝統文化と言え、400年の伝統を誇る上野焼（あがのやき）をおいてほかにはない。

陶芸文化の新時代を予感させる取り組みが相次いだ今年、やきものが持つ魅力と可能性を追った。

東光寺 焼仏の残像



幾多の歴史の変遷のなかで、時の権力者に保護され、その盛衰と共に寺運を重ねてきた興国寺。その末寺にあたるのが草場にある東光寺だ。この寺に収められていた鎌倉時代の経筒は、昭和36年、福岡県有形文化財に指定された。

経筒とは別に、東光寺には黒こげの仏像が伝えられている。もの悲しく輪郭だけを残したこれらの像は、豊後の大名・大友宗麟の焼き討ちに遭い、残ったものだという。

豊前における筑前との境にあった赤池町は、かつて交通・経済・文化が交差する要衝であった。それだけにこの地は、戦乱の世に争いが絶えなかった。東光寺に残された焼き仏は、それを物語る歴史の証人だと言えよう。華やかな歴史があれば、悲しい歴史もある。それら全てが、いまの町の軌跡となっている。



↑東光寺経筒。鎌倉時代のものとされ、約800年を経た経筒は今でもほとんどが読める。昭和36年、福岡県有形文化財指定。（赤池町教育委員会蔵）

全国展開という戦略

上野と小石原。やきものにおける県内の2大産地であり、国指定の伝統的工芸品である。今年、両産地が10月9日から3日間「上野焼・小石原焼連携陶器まつり」を開催した。共同PR、両地を結ぶバスツアーなどに取り組み、なかでも各日百個のマグカップ無料絵付けは、従来の「見て買う」だけのスタイルに「体験する」という要素を加えた。上野焼協同組合・青柳一夫理事長が経緯を語った。

「連携で成功した東北三大祭りがヒントでした。都市圏を対象に全国的な視野に立ち、共同開催に踏み切りました」。

やきものとしては民芸色が強い小石原焼に対し、上野焼は開窯当初から茶道具を作り続けてきた、いわゆる茶陶である。その性質や客層が異なる点も連携のしやすさにつながった。両地間が1時間でアクセスできるという地の利も大切な要素となった。

近年、数々の大賞を受賞し、一躍「小石原」の名を全国に広めた福島善三さん。小石原焼の代表的作家に話を聞いた。

「中央に出て知名度の低さを実感しました。これからは小石原にしろ上野にしろ、ターゲットは東京だと思っています。地元ポスターを貼るより福岡市や北九州市にその分多く貼った方がいいですし、展示会を福岡で5回やるなら東京で1回やったほうがいい。知名度を上げるためには、いかに知らない人にPRするかが大切なのではないでしょうか」。

上野と小石原

【連携と伝統のかたち】

伝統工芸の産地が活性化するために今後求められるものとは何なのか。上野焼と小石原焼のつながりから、そのヒントを探ってみた。

上野は茶陶の世界では知名度が高い。しかし、一般には馴染みが薄く「うえの」と読まれるのが現状だ。小石原の場合も、知名度は近隣の小鹿田焼（大分県）にやや押されている。上野焼・小石原焼の両組合間では、県内での展示会予算をそのまま東京の開催に充て、両産地で共同実施する構想が浮上している。

伝承から伝統へ

日本の高度成長期の「やきものブーム」で窯元は全国的に急増した。バブル景気を経て今、やきもの業界は長引く不況にあえいでいる。伝統工芸の火を消さないためにも、連携による産地の活性化は極めて重要だと言う。青柳理事長に聞いた。

「客層やニーズに応えることも確かに必要です。しかし、販売重視になり、大



【上野焼】豊前藩主・細川忠興が李朝陶工・尊楷を招いて開窯した茶陶。緑青釉など多種多様な色彩が特徴で、27軒の窯元が点在している。（昭和58年、国指定伝統的工芸品）



【小石原焼】庶民の暮らしを支え、用の美を追究してきた民陶。飛びかん、はけ目、櫛目などの技法が特徴で、窯元数は50軒にもおよぶ。（昭和50年、国指定伝統的工芸品）



←両会場で行われたロクロ実演。手品のように成形される技術を前に、お客さんの表情もほころんだ。

↓上野・小石原の両会場で行われたマグカップ無料絵付け体験。連携陶器まつりの期間中、各日先着百人が思い思いの絵を描いた。窯元で焼成され12月1日からふれあい交流会館で品物を受け取ることができる。



→第50回日本伝統工芸展日本工芸会総裁賞を受賞した福島さんの大作「鉄釉掛分案文鉢」。

伝承を越えた伝統



【福島善三さん】小石原焼の高度な技術を踏まえ、色調・技法・素材を最大限に活かした作品で知られる。第15回日本陶芸展大賞桂宮賜杯、第50回日本伝統工芸展日本工芸会総裁賞など受賞多数。

日本伝統工芸展は7部門からなる日本最大の工芸展で、総裁賞は最高賞にあたる。過去50年の歴史の中で陶芸部門からの受賞は福島さんを含めわずか5人。日本工芸会正会員、福島本窯、45歳。

●「最後のひとすくい」がしやすいように、底の中心部分をくぼませたスープ皿。飲み残しが少ないうえ、器を傾けることなく来客時でもスマートに食事できる。(庚申窯)



● 逆L字型の取っ手の角度をミリ単位で調整した器。持ちやすさを追求するとともに、手を抜きやすいように取っ手の下部を広げた。優しい色彩も魅力。(青柳不老園)



● ストローが使える球形のかわいらしい器。首を曲げるのが困難な人や寝たきりのお年寄りを想定して考案された。大きめに作られた土台により安定感も抜群。(堀田窯)



● 取っ手部分を斜めに取り付け、手首の動きを最小限にして飲むことができるウーロン茶用の器。鉄釉の深い色調が、落ち着いた雰囲気をもたらし出している。(十時窯)



● 椿の絵をあしらった焼耐用の器。緑のわん曲や中央のくぼみを利用し、持ちやすく、落ちにくいフォルムに仕上げた。シンプルでゆるやかなラインが特徴。(守窯)



→「スローライフ和みのかたち展」で新作を発表。ユニバーサルデザインの器に驚きの声上がる。



「和みのかたち」という提案

【器が持つ可能性の追求】

使いやすさと美しさを研究した上野焼の新作発表展。スローライフを彩るこだわりの作品が、上野焼 400 年の歴史に新たな息吹をそそいだ。

ユニバーサルな器たち



● 上野焼特有の緑青釉で彩った焼耐用カップ。4段のくぼみが指にピッタリと密着して、取っ手に手を通すことで握力の少ない人でも安定する。内側から見れば、このラインが焼酎を水やお湯で割る量のメモリ代わりになる。取っ手があるので中身が少々熱くても安心。(城野窯)



● 今まで、ありそうでなかった上野焼のティーカップ。コーヒーカップに比べ口がやや広く、底が浅い。愛らしい千鳥の取っ手が、女性の人気を集めた作品。(渡窯)



● 大人の手にすっぽりと入るサイズの子ども用カップ。大人だけでなく、子どもたちにもやさしいものを使って欲しいという家族スタイルの楽しみ方を提案した。(高鶴窯)



使いやすさへのこだわり

「いい酒を気に入ったぐい飲みで楽しむ。私が一番心とむむひとときです」と笑顔を浮かべる赤池町商工会の加藤正士さん。10月9日から11月3日まで行われた上野焼の新作発表会「スローライフ、和みのかたち展」の仕掛け人だ。

この事業で加藤さんは「飲む」をテーマに、器が持つ可能性を徹底的に研究した。まず、幼児、中高年などの「年代別」。くつろぎの場、かしこまった場などの「状況別」。焼酎、紅茶などの「飲料別」。家庭、飲食店などの「用途別」に分け、さらに細分化した。消費者層の拡大と販路開拓を目的とした試みは、上野焼 400 年の歴史の中で、未だかつてない観点による作陶へと結びついた。

「リラクセスしたいときは作法を気にせず、ソファアールであぐらをかいて抹茶を飲みたい」。知り合いの税理士が言った何気ない言葉がヒントになった。

「和みの器」を考える中で、握力の弱い障害者や高齢者が使いやすいものができないかと模索した。従来、障害者用の器は、型ものやプラスチック製品しかなかった。そんな人たちが含め「だれにでも器を楽しんで欲しい」という願いからユニバーサルデザインという発想が生まれた。デパートの器の販売員に講習会を受けるなど、各窯元が使う立場に立つて試行錯誤を繰り返した。その結果、手に取ってみると「なるほど」と、だれもが

うなずく作品ができあがり、展示場に並んだ。使いやすさにこだわり、陶器ならではの味わいや温かさをプラスした伝統的工芸品がここに誕生した。

「今からは額に汗するより脳に汗する時代。上野焼を崩さないためにも伝統技法に基づいた新作を提案しなければなりません」と加藤さんは力を込める。

近年では「とにかく安いものが多い」という考えと「気に入ったものは高くても欲しい」というニーズの二極化が目立ってきた。これからの上野焼を考えたと、き、伝統的な器を追求するのと同時に、ほかの産地とは違った形を常に考え、打ち出していく必要があるだろう。それが知名度のアップにつながるっていく。

「上野焼は全国的に見ればまだまだ知られていません。『逆もまた真なり』の発想で大胆に世界へ打ち出す手もあります」と意欲的な加藤さん。将来、上野焼を「ジャパン・ブランド」として掲げ、世界市場に乗り出す夢を持ち続けている。

【加藤正士さん】(かとう・まさし) 赤池町商工会主席経営指導員。一昨年の開窯 400 年祭、昨年の温故創新展などの企画やたがわ広域陶器まつりに携わり、上野焼をバックアップしている。(北町)



→すくいやすいように縁をわん曲させた皿 (堀田窯)



↑国民文化祭のPRに大活躍したマスコットキャラクターの「飛梅丸」。

参加し、発表し、交流した文化の祭典

国内最大の文化の祭典「国民文化祭」。今年、「第19回国民文化祭ふくおか2004」が開催された。福岡県とその市町村は115の事業に取り組み、国民文化祭史上最大規模の記録的な祭典が実現した。陶芸部門を担った赤池町は「美術展 陶芸」の会場として、全国公募の展覧会を町をあげて開催した。

審査員は県外から大樋長左衛門さん、酒井田柿右衛門さん、厚東孝治さん。県内から吉田浩通さん、石原祥嗣さん、佐藤好昭さんという豪華な顔ぶれ。北は北海道から南は沖縄まで140点が出品され、厳正な審査の結果、入賞9点、佳作17点、入選68点が選ばれた。11月6日から14日までの9日間、上野の里ふれあい交流会館に94点の秀作を一堂に展示。延べ5200人が洗練された作品を鑑賞し、やきものの魅力を再発見した。

晴天に恵まれた初日、町内小中学生合作のモニュメントと陶板が、人びとを招くように会場前に飾られた。町民文化祭や小学生の日韓文化交流も同日に行われ、赤池町は文化一色の日となった。さらに、初の全窯元の参加を実現した「上野焼陶器まつり」が展示期間中、同時開催され、400年の歴史を誇る「陶の里」にふさわしい陶芸文化を全国に発信した。

↓会場ですぐ目に飛び込んでくる町内小中学生の作陶作品。



↓好きな言葉を彫った市場小6年生90人。



↓個性的な模様を入れる上野小6年生27人。



審査員長である大樋長左衛門さんの講評を受ける上位3人の受賞者。写真上から順に／▶文部科学大臣奨励賞・加月富義さん（写真右端・久留米市）▶国民文化祭実行委員会会長賞の井上康さん（写真右・福岡市）▶福岡県知事賞の丸山栄子さん（写真左・栃木県佐野市）



↑美術展 陶芸の秀作94点が一堂に会した「上野の里ふれあい交流会館」。展示場とギャラリーの2か所に入選作品がずらりと並んだ。開場とともに多くの観覧者で埋まった。



←赤池中美術部は90×180cmの陶板を作成。



←上野焼窯元で出品作品をつくる機会もあった。

陶の里で出会う創造と感動

【第19回国民文化祭 美術展 陶芸】

まちをあげて行った全国規模の展覧会「とびうめ国文祭 美術展 陶芸」。洗練された優秀作品を一堂に展示し、新たな陶芸文化の共創に取り組んだ。

↓テープカットで展示会場の扉が開かれた。



↑開幕を飾った東鷹高のプラスバンド演奏。



↑菊谷水月先生による午前のお茶会。



↑厳粛な雰囲気での表彰式（中央研修所）。



↑午後のお茶会は辻村栄子先生が務めた。

←協賛事業として行った上野焼陶器まつり。上野焼27窯元すべての参加が初めて実現した。展示期間中の9日間、多くの人が上野焼のぬくもりに触れた。



→「今まで作陶活動をしてきてよかったです」と最高賞にあたる文部科学大臣奨励賞に輝いた加月富義さん。作品名は「炭化窯変壺」、おもむき深い大作だ。



【さかいだ・かきえもん】重要無形文化財保持者（人間国宝）・日本工芸会常任理事・九州産業大学教授。「濁手（にごしで）」と呼ばれる温かみある白色と美しい赤絵による「柿右衛門様式」を継承する。昭和57年に十四代を襲名、70歳。（佐賀県有田町）

日本固有の美と心

炎が織りなす醍醐味

【ことう・こうじ】日展会員・鹿児島大学名誉教授・現代工芸美術家協会幹事。28年間、鹿児島大学教授を務め、灰と炎が織りなす窯変を研究。日展特選2回をはじめ入賞多数。日展など数々の審査員を務める。退官後、故郷山口で開窯。68歳。（山口県山口市）



コーディネーター：林田スマさん

達人が語る陶芸ワールドへようこそ！ 美術展陶芸初日のメインイベント「陶の里シンポジウム」から、生活を彩るやきものの楽しみ方と日本を代表する陶芸家のこだわりをお聞きます。

やきものをもっと身近に！

【陶の里シンポジウム】— 達人が語る陶芸の世界 —

◎ 11月6日／赤池町中央研修所（パネリスト敬称略）

【酒井田】人間の手で作るものですから、当然、手で触ってお使いいただきながら、その作者なり、その物が持つている質感などをお楽しみいただきたいと思います。

作品を機械で作れば合理的で簡単にできます。しかし、やはり心でとらえるというか、感じるというか、そういう感性を日本のみなさんはお持ち合わせなんですよ。日本人の美意識は世界的に見てもすばらしいものがあります。

私が一番困っているのは絵の原料。こだわらなければいくらでもあるのですが、今のものは純度が高く、鮮やかすぎます。年代を経た原料の色は、何ともいえない「とろり」

とした深みというか、味わいがあるんです。焼き方にしていただく必要がありますが、松の薪がないとダメなんです。「最後のひと味」というのは、日本人のみなさんなら、受け継いだ遺伝子で必ず分かるはずなんです。土にしても、上野は上野、萩は萩で、その土地、その土地に産する土の味は、何物にも代え難いものです。それら日本の心を大切にしたいと思っています。

有田の伝統的なものは、重そうに見えて軽く、そうでないものは、軽そうに見えて重い。本物がいいとは限りませんが、ぜひ触って、確かめて、使う方にも見る方にも楽しんでいただければと思います。

とした深みというか、味わいがあるんです。焼き方にしていただく必要がありますが、松の薪がないとダメなんです。「最後のひと味」というのは、日本人のみなさんなら、受け継いだ遺伝子で必ず分かるはずなんです。土にしても、上野は上野、萩は萩で、その土地、その土地に産する土の味は、何物にも代え難いものです。それら日本の心を大切にしたいと思っています。

【大樋】人はやがて土に帰ります。かつて文明が太陽で火をおこしたように、土と炎は尊いものですよ。それが基軸となり、衣食住とセットで歩んでいるのが陶芸です。世界中がやきもの文化と非常に密接な関係で進んでいます。

アメリカに行くと、パワーというか、勢いがすごいですよ。伝統が無い強みがあるんです。私も日展を軸に相違創作で世界の作品と勝負してきました。昭和から平成にかけて、大樋焼の鉛釉を私なりに3種類ばかり作っただけです。それが大樋の伝統のなかに加わった。「守・破・離」という利休の言葉にあるように、教えを「守」り、試行錯誤し

て「破」り、確立して「離」れる。そういう意味で伝統と創作を行き来しています。これからは陶芸家が自己責任として、いいものを生み出す姿勢を全うしなければなりません。でなければ、陶芸文化は目まぐるしく動く時代にやがて埋もれてしまいます。

ぜひ、いいやきものをみなさんに使ってもらっていただき、ユニケーションの場として、お買いものを楽しんでいただきたい。ここで一番近いのは上野ですから、そのぬくもりを感じて欲しいですね。美味しいものがいい器に映えることは、大変うれしいことです。みなさんそれぞれに興味趣向を大いに楽しんでください。

【おおひ・ちようざえもん】文化功労者・日本芸術院会員・日展常務理事・現代工芸美術家協会理事長。加賀藩の御用窯大樋焼十代目。11月4日に日本の文化功労者に顕彰され事実上陶芸界のトップに立つ。今回が顕彰後初の登壇となった。77歳。（石川県金沢市）

「守・破・離」の精神

【おおひ・ちようざえもん】文化功労者・日本芸術院会員・日展常務理事・現代工芸美術家協会理事長。加賀藩の御用窯大樋焼十代目。11月4日に日本の文化功労者に顕彰され事実上陶芸界のトップに立つ。今回が顕彰後初の登壇となった。77歳。（石川県金沢市）

剛直な古上野の追求

【わたり・きゅうべえ】上野焼開祖・尊楷の娘婿（渡久左衛門）の流れである渡窯を復興し、昭和39年に十一代を継承。平成9年に渡久兵衛を襲名し、上野焼を代表する作家のひとりとして活躍する。今回、上野焼窯元を代表して登壇。赤池町文化連盟会長、75歳。

ですから、使い手にもお願いしたいのです。一枚の皿でも「百円ショップのものより少し高いかな」と思いますが、機械で作ったものにはない価値があります。それを求めているのだと思います。そうしなければ、日本のやきもの文化そのものが、ダメになってしまう。

使い手が厳しくいいものを求めれば、作り手の責任も技術も高まります。そうすることで、自然にやきもの文化が向上すると思うのです。

【渡】「ご存じのように、上野焼は文禄・慶長の役で生まれたやきものです。以前、韓国で先祖たちが渡来する前の古いやきものを見ましたが、上野初期のものと比較しますと、どこかやさしい感じがしました。ところが、4百年前に上野焼が開窯した釜ノ口窯のものは、戦国時代を生き抜いた武将好みで、剛直かつ豪快でした。そして、千変万化といった感じですよ。私はこれから、いっそうこの初期上野を研究し、見ても使っても楽しめるやきものづくりに精進したいと思っています。ちなみにやきものの使い方でですけど、先日コンビニエンスストアでお弁当を買った

んです。一人では多いので、妻と二人で分けました。それで、わが家の2級品を使いまして、これに分けたんです。すると、やはり美味しいんですね。プラスチック容器で食べるのとはぜんぜん違うんです。みなさん方には買う楽しみ、見る楽しみ、そして使う楽しみがあります。それぞれの楽しみ方に発見があるかと思っています。そうして、広くやきものを愛していただきたと、上野の里から願っています。



写真右から▲大樋焼特有の釉薬「大樋釉」 ▲濁手・赤絵による伝統技法「柿右衛門様式」。

写真右から▶厚東氏が研究し続けた「窯変」の色彩▶渡久兵衛作品を代表する「琵琶釉」。





←空間を彩る高鶴さんのクレイアート。アメリカの開拓者魂を表現した。



野点の卓上に並んだ高鶴さんの新旧の器。いずれも計算しつくされた造形で、手に取ればしっくりとなじむ。遠賀川流域にある装飾古墳の色彩を表現した器（左）は、陽の光にきらめき、明るい空間に絶妙な調和をみせる。



【こうづる・げん】昭和13年、上野焼高鶴窯に生まれる。26歳で久山町に築窯し独立。昭和43年から日本伝統工芸展で15回連続入選し、日本工芸会会長賞2年連続、毎日陶芸展大賞、日本陶磁器協会賞、福岡県文化賞ほか受賞多数。昭和55年にハーバード大学に招かれ、日米両国で作陶する。昭和62年にアメリカ永住権を得、世界を舞台に活躍している。

進化する上野の遺伝子

【世界の真髄にみる陶芸文化】

「チェンジ CHANGE・チャレンジ CHALLENGE・クリエイト CREATE」。変化・挑戦・創造を意味する3つの「C」を座右の銘に掲げる高鶴元さん。日米で創作活動を展開する世界的な陶芸家である。上野焼の窯元に生まれ、古上野に魅せられた高鶴さんは、陶芸界に名を馳せながらも24年前に海を渡った。立ち止まることなく、伝統に新風を注入し続ける上野の魂がここにある。

先端を歩む革新の作陶

「上野なくして、今の私はない」。

陶芸家、高鶴元さんはそう言いきる。一人で作陶に没頭する場を求め、上野を離れたのは26歳のとき。故郷を離れ、いっそう古上野を研究した。自宅2階にある陶片の数は11万点にもおよぶ。

「これら、いにしえの陶片は私の師匠、声なき声を聞き、学びました」。

高鶴さんは、膨大な数の古陶を1点ごとと詳細に調べ上げた。そして、陶工たちの技術を学び取り、卓越した技量でその造形を体得した。さらに、櫚や竹、銀杏など80種類を越える釉薬を自在に駆使し、29歳と30歳のときに日本伝統工芸展で日本工芸会会長賞を連続受賞した。

しかし、やきものの可能性を追い求めていた高鶴さんは、日本での地位に安住することなく、ハーバード大学からの誘いを機に創作の場をアメリカへと移す。

「朝鮮から渡来した陶工の欠片たちが、そして私に宿る上野の遺伝子が、海の向こうへと突き動かしただけでしょう」。

開窯当初の陶工たちが望郷の念を持って作陶したように、高鶴さんは自らを同じ立場に置いた。仏教の真理を求めて中国の元へ渡った上野の名刹、興国寺開山である無隠元晦にも影響されたという。

たどり着いたのはボストン郊外の街、トップスフィールド。偶然にもそこは直訳すると「上の野原」上野」だった。広大な風土と異文化が、高鶴さんの作陶へのフロンティアスピリッツ（開拓者魂）を動かした。そして、空間や明るさに負

けない、鮮烈な色彩の作品が生まれた。身の丈ほどもあるオブジェが立ち並ぶインスタレーション（空間芸術）は、周囲に調和しつつ、実に躍動的である。

「アメリカでは新窯が焚けない。逆境に置かれ発想を転換し、表現する作風に変えていきました」。

その燃えあがるような日本原初の赤は「コウゾル・レッド」と呼ばれ、世界で賞賛された。奔放な色彩が踊る高鶴作品の数々は、やがて子どもたちの心に、故郷の風景の一つとして刻み込まれていく。

「ろうそくの灯りが照らす畳の文化から明るく広い空間へと生活様式が変わりました。詫び寂びの概念もまた、時代に合わせて変化します。ただ踏襲されるのは伝承であって伝統ではありません。21世紀にふさわしいものを作るためには、受け継ぎ、守られてきた本質を見据えながら変革する必要があります。新しい形、色、思想が求められます。そのためには、常に自分を磨かなければなりません」と高鶴さんは語る。

「明るい空間でコーヒー感覚で抹茶を楽しんで欲しい」と、現代感覚に古代のイメージを注入し、勇壮華麗な日本太古の原色を手のひらの碗に凝縮した。陽光に照らされ、ますます映える碗の中には、小さな宇宙が表現されている。

安土桃山の文化が、陶芸史に大きなうねりをみせた革新の時代だったように、今の先端を行く陶芸文化が、未来の伝統を築いていく。高鶴さんは上野の遺伝子を進化させ、踏みとどまることなく、歩み続けている。

福智に迫る

まちを思い浮かべるとき、真っ先にまぶたの裏に描き出される福智山。見渡せばどこからでも目に飛び込んでくる秀麗なこの山に、一歩近づいてみよう。

福智山の麓に忽然と姿を現す巨石。古来から地元では「平石」と呼ばれ、あがめられてきた。長い時代の堆積を思わせずにはおかぬ苔が、しつとりと緑のしとねを延べている。聞こえてくるのは、生い茂る木々がそよぐかすかな葉音だけ。周囲には何体もの石仏が配され、ここが俗世間から離れた聖域であるかのよう閑寂な空気に包まれていた。

知られざる文化探訪

【謎の平石】

この町には太古の昔から命を宿す山河があった。その恩恵を受け、豊かな自然と文化が生まれてきた…

くから地元の人たちに神聖な石として信仰を集めていたようです。周囲の石仏は近世のもですが、石の下には横穴があり、大昔の墳墓のようにも見受けられます。このほかにも弥生時代の支石墓に似た石を町内で多く確認しています。

「平石」については発掘調査が行われていないため、現時点ではその詳細を解き明かすことはできない。しかし、いずれにしても謎を秘めた巨石であることに違いない。福智山には私たちが知らないたくさんの自然や文化が息づいている。普段、ほとんど気にしない風景が、一歩近づいてみると圧倒的な存在感を持っていることに心打たれるのだ。



↑ 10月31日に行われた探歩会主催の「文化財研修会」。18人が参加し、前原市の志登（しと）支石墓群などを見学した。井田用会（いたようえ）支石墓の前で説明するのが、探歩会事務局の小林省吾さん（松本）。



↑「皿山の平石」の下に掘られている横穴。巨石はいくつもの石に支えられている。



謎を秘めたその巨石は「平石」と呼ばれ、あがめられた



【折躑躅】天保13年（1728年）野坡一行の上野清遊を記した俳書。筑前直方 文雄撰。文中の「浅生」が野坡の号である。（天理大学附属天理図書館蔵）



【志太野坡】（しだ・やば）越前福井出身の俳人。芭蕉十哲の一人で「軽み」の俳風では蕉門随一の人といわれる。西国・九州を行脚し、各地に有力な門人が多く、その数は千余人に上ったとされる。蕉門七部集の一つに数えられる「炭俵」を刊行した。（画像／柿衛文庫所蔵『芭蕉堂歌仙図』の野坡像）

『折躑躅』 桃源の誘い

【俳人・志太野坡を魅了した上野峡】

芭蕉十哲に数えられる俳人・志太野坡。彼がこの町に訪れたことを知る人はほとんどいない。野坡一行の上野清遊をまとめた俳書『折躑躅』は、上野峡の明媚な姿を「桃源」と讃えた。



「上野皿山の瀑布を見に行けり、爰は風景桃源に似通い——」
俳書『折躑躅』の冒頭部分にはこう記されている。俳聖と讃えられる松尾芭蕉の有名な10人の門人、いわゆる芭蕉十哲の一人である俳人・志太野坡。今から276年前に、彼は上野峡を訪れていた。その様子を同行した門人のひとりである青山文雄（直方・多賀神社宮司）がこの書にまとめた。ここで、野坡一行が上野で詠歌するまでの様子をご紹介します。

『折躑躅』訳／小林省吾さん

「滝のほとりより見上げれば、水上はいづこやらん。九天千尺の布をはへたり。実山姫の手玉、猶ゆかし。あるは峯作る雲のみすみす消えて行く如し。みな感情におゝわれて口をつぐめば、翁（野坡）も唯仙境に入る心地するなど聞へて、詠め入給へり。それより皿山陶工伊左右衛門が許にたどりつきぬ。主人みずかなせる花瓶にいろいろの花折入れて、幽谷上野のつかれやすめ給へなど、ねんごろにもてなしけり」。

「白糸の滝」の絶景に酔いしれた野坡一行を上野焼陶工の伊左右衛門が、自作の花瓶に躑躅などの花を折り入れ、丁重にもてなした。そして、俳書のタイトルに結びつくこの句が生まれた。

「投入れて 滝見顔なり 折躑躅」
私たちが日々の営みの中で忘れかけた故郷の景色、そのすばらしさをこの詩が思い出させてくれる。この町で野坡が残した貴重な一句、後世に伝えていきたい上野峡の賛歌である。



【句の解説】養命大学をはじめ町内外で広く俳句を指導されている日本伝統俳句協会ホトトギス同人参与の池田一歩さんに、野坡の句を解説していただいた。

「風雅な上野焼の花器に投げ入れられた躑躅が、落下する滝をいかにも眺

めているようであるといった句ですが、上野峡の景勝に感動した作者が、自分を躑躅とみなして詠んだものと推測されます。これは擬人法という詠い方で、芭蕉が確立した「蕉風」のあり方として、こうした詠い方をよく見かけます。芭蕉が奥の細道の旅立ちの際に詠んだ『行く春や鳥啼き魚の目は涙』という有名な句があります。

【白糸の滝】福智山にある落差25メートルの滝。この滝を中心とした福智川流域のおよそ3kmの峡谷が「上野峡」と呼ばれている。桜、紅葉など四季折々の変化が楽しめ、夏は涼を求めて多くの人が訪れる景勝地だ。地元では龍が住んでいたという逸話が残っている。



【生け花を再現】陶工・伊左衛門は、当時あった十時家・渡家・吉田家のいずれかの人物かと思われる。今回、十時家の十時開甫さん鈴子さん夫妻にお願いし、当時を再現した。十時さん宅の庭に咲いた躑躅の返り花を江戸期の釉薬・紫蘇手の上野焼に生けていただいた。





町から姿を消した植物 ③ カセンソウ

（キク科）県：絶滅危惧Ⅱ類
福智草原に分布していたがキキョウと同じ理由で消滅した。これらの植物保全のためには、防火帯としての定期的な草刈りが必要になる。高さ50cm～1m。7～8月に直径3.5～4cmの黄色の頭花を数個つける。



町から姿を消した植物 ② キキョウ

（キキョウ科）国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類
日当たりのよい山地草原に生える多年草。福智草原に散在していたが、近年ススキやその他の草木の密生、かつ高性化により消滅した。本種の花期は7～9月。



町から姿を消した植物 ① オキナグサ

（キンボウゲ科）国：絶滅危惧Ⅱ類
山地草原の日当たりのよい場所で周辺植物の草丈がごく低い所に生える多年草。町内2か所に生育していたが、盗掘かススキなどの密生により消滅。3～4月、花茎の高さ約10cmで開花し、花後伸長する。



↑ 高さ23m、幹周り3.83mの虎尾桜。福智山の中腹、標高400mの所にある。エドヒガンという希少品種で、濃いピンクの花が特徴。（赤池町指定文化財）



←環境省発行の『絶滅のおそれのある野生生物』通称「レッドデータブック」と呼ばれている（写真左から2冊）。福岡県が発行した『福岡県の希少野生生物』。熊谷信孝さんが専門部会の会長として編集に携わった。

↓ 10月に町内で発見した希少種「タコノアシ」が紅葉、笑顔を浮かべる熊谷信孝さん（文化財専門委員・下小路）。町の植物研究の第一人者で、その保護を呼びかけている。



赤池町の豊かな自然を代表する福智山は、多種の植物を育んできた。山頂部はクマイザサやススキの草原、中腹はスギやヒノキの人工林が広がる。山麓部は、アカマツ林からシイやコナラの林へと姿を変えている。遠目には分からないが、少しずつ環境は変化している。

『レッドデータブック』という本がある。これは絶滅に瀕した動植物をとりあげた本で、世界、国、県などの単位でまとめられたもの。絶滅の危険度順に「絶滅危惧ⅠA類」「絶滅危惧ⅠB類」「絶滅危惧Ⅱ類」「準絶滅危惧」などにランク分けされている。

町内には、国のデータが上がっている植物が16種、福岡県のデータでは27種が生育する。しかし、過去にはもっとたくさん種類のあった。近年にはオキナグサ、キキョウ、カセンソウがこの町から姿を消した。失った自然を取り戻すことは難しい。自然の遺産を守ることは、私たちの重要な責務だと言えよう。

もう戻ってこないのだろうか

母樹と向き合う

【虎尾桜の声を聞く】

町の財産である豊かな福智山の自然。その象徴とも言えるのが樹齢600年の虎尾桜だ。枯死寸前から息吹をとりもどした巨桜は、人と自然の共存について問いかけている。

巨大なる桜の神々しさに立ちすくむ。迫力があっても厳しくはない。偉大ではあるが優しさを感じる。樹齢600年の虎尾桜、県内最大のエドヒガンである。

「日本の桜百選」に名を連ねる虎尾桜だが、10数年前までその存在はほとんど知られていなかった。しかも、発見当初の虎尾桜は枯死寸前の状態だった。第二次世界大戦後の拡大造林政策による環境の変化が原因だった。その窮地を「虎尾桜を心配する世話人会」（熊谷信孝会長）の精力的な保護活動が救った。樹木医を呼び、幹や枝を支え、日光が注ぐよう周辺の杉を伐採した。同時に観光PRも積極的に行い、今では、毎年2千人以上の花見客が訪れるまでになった。

自然の尊さを無言で主張するかのよう

に、福智山の中腹に立ち続けている孤高の一本桜。福智山に咲くエドヒガンの母樹である。この霊木と向き合うとき、私たちは安らぎを覚える。だから来年もまた虎尾を仰ぎたいと願う。そして、大樹の声に耳を傾けるのだ。



←虎尾桜の苔むした太い幹。支柱に支えられながらも、春には強い生命力で可憐な花を咲かせる。

レッドデータにある生命たち

【まちにある絶滅危惧の植物】危険度順 ① 絶滅危惧ⅠA類 ② 絶滅危惧ⅠB類 ③ 絶滅危惧Ⅱ類 ④ 準絶滅危惧

それらは色とりどりで鮮やかなものが目立つ。その美しさゆえに乱獲されてきたものが多い。絶滅危惧の植物は生育環境の変化に非常に敏感で、環境が変わるとすぐに消滅してしまふ。ここでは種の保存・保護のために、それぞれの生育地は挙げない。山野で発見しても決して採ることのないように。貴重な自然の美しさを大切にしたい。

① ツキヌキオトギリ
(オトギリソウ科)
国：絶滅危惧ⅠA類
県：絶滅危惧ⅠB類



山地で日当たりがよく、湿気のある場所を好む多年草。対生の葉が合着し、その中央を茎が貫いた形になっている。高さは30～60cm、6月に小さな黄色の花からなる集散花序をつける。

② キエビネ
(ラン科)
国：絶滅危惧ⅠB類
県：絶滅危惧ⅠA類



かつては町内の山にたくさんあったが、1970年代のエビネブームで乱獲され、絶滅状態になっていた。近年ようやく、また花が見られるようになった。花期は5月。

③ ロクオンソウ
(ガガイモ科)
国：絶滅危惧ⅠB類
県：絶滅危惧ⅠA類



日当たりのよい草地に生える多年草で、高さは80～130cm。8月ごろ、葉腋の花序に小さな帯黄色の花をつける。袋果の中に長い種髪のついた種子ができ、飛散する。

④ ツクシタンポポ
(キク科)
国：絶滅危惧ⅠB類
県：絶滅危惧ⅠB類



日当たりのよい開けた草地や路傍に生える。「セイヨウタンポポ」よりも大形で、花の径は3cmあまり。総苞の外片が反り返らずに接合しているのが特徴。外片の先端部に小形の小角突起がある。

⑤ ナツエビネ
(ラン科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧ⅠA類



冷涼な気候を好むエビネで、他のエビネ類と同様にほとんど絶滅状態にある。葉は3～5個で薄い緑色、縦のしわがある。花期は8月で、淡紫色の花が10～20個つく。

⑥ ホソバオグルマ
(キク科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧ⅠB類



彦山川の河川敷や堤防上に小群落がある。茎は細くて堅く、高さ40～80cm。葉は基部で茎をなかば抱いたような形になっている。頭花は黄色で、径は2～3cm。花期は7～9月。

⑦ マメヅタラン
(ラン科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類



樹幹や岩上にごく細い根茎で着生する小さな蘭。ムギランと同じような環境を好み、長さ1cmあまりの葉をまばらにつける。糸状の花茎の先に淡黄色の小花が1個つく。

⑧ ムギラン
(ラン科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類



岩上や樹幹に細い根茎で着生する小形の蘭の1種。まばらに小さな卵形の偽球茎をつけている。偽球茎につく葉は厚く、長さは1～1.5cm。花は葉の陰に1個つく。

⑨ キンラン
(ラン科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類



高さ20～30cmの多年草。若いヒノキ林や広葉樹の2次林などの林床に生える。4～6月、茎の先に3～10個の花をつける。よく似た姿のギンラン(白色の花)はさらに少数。

⑩ エビネ
(ラン科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類



山地に最も多いエビネであるが1970年代のエビネブームで採られ、ほぼ全滅した。花の色は茶色系が多いが赤色や緑色など変化に富む。キエビネとの自然交雑種がソノエビネである。

⑪ スズサイコ
(ガガイモ科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類



山地草原に生える多年草。細い茎は直立して高さ40～60cm、葉は対生。7～8月、茎頂に黄褐色の花をつけるがあまり目立たない。果実は長さ5～8cmの披針型。

⑫ タコノアシ
(ユキノシタ科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：絶滅危惧Ⅱ類



溜池や川岸などの湿地に生える多年草で、茎は直立して30～50cm。茎の頂や上部葉腋から数本の花序枝を出す。和名は、多数の花が吸盤のついた「タコの足」のように並ぶため。

⑬ ゲンカイツツジ
(ツツジ科)
国：絶滅危惧Ⅱ類
県：準絶滅危惧



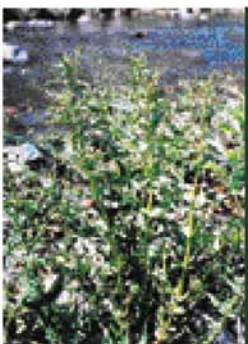
福智山のカコウ岩の岩場に生えるツツジで、樹高は1.5m。古い株では幹が数本株立ちしている。3月下旬～4月上旬に紅色のきれいな花をつける。花のあとに葉が伸びる。

⑭ ウスキヌガサタケ
(スッポンタケ科)
国：絶滅危惧Ⅱ類



広葉樹林や竹林に生えるキノコで高さは5～10cm。傘は黄色で緑褐色の粘液があり、悪臭を放つ。柄は中空で白色ないし黄色。地面に付く程長い黄色で網目状の菌網が特徴。

⑮ カワヂシャ
(ゴマノハグサ科)
国：準絶滅危惧
県：準絶滅危惧



絶滅危惧種であるが、赤池町では彦山川、福智川、農業用の水路などに広く生育している。茎は柔らかく、枝分かれして高さ10～50cmで直立する。若い体は食べられるという。

⑯ イガオホオズキ
(ナス科)
県：絶滅危惧ⅠB類



照葉樹林帯の林床や林縁部などに、まれに生育する多年草。高さ40～60cmで、茎はまばらに分枝して広がる。6～8月に細長い花柄に黄白色の花を下垂する。液果は径1cm。

⑰ ノヒメユリ
(ユリ科)
県：絶滅危惧Ⅱ類



日本産の「ユリ」の仲間のなかでは、花が最も小さく山地の草原に生える。高さ50cm～1m、花期は8月、花は橙赤色で、開花初日は平開に近いが、2日目からは反り返る。

⑱ リンドウ
(リンドウ科)
県：絶滅危惧Ⅱ類



日当たりのよい山地の草原に生える。高さは20cm～1m。花期は10～11月で、茎頂および上部葉腋に1～多数の青紫色の花をつける。根茎部は苦みが強く、健胃薬として利用される。

⑲ ヨロイグサ
(セリ科)
県：絶滅危惧Ⅱ類

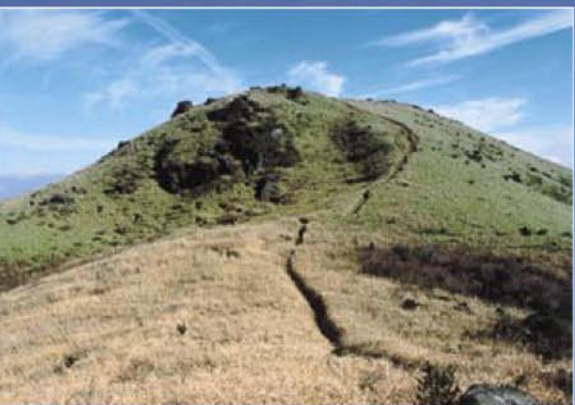


大形の植物で、茎の高さは2mに達する。山地の開けた場所、原野などに生え、最近では川土手にも見られるようになった。7月ごろ、傘状の大きな花序をつける。

⑳ シオン
(キク科)
県：情報不足



野生のシオンの存在は極めてまれ。彦山川の堤防に見られ、工事などの際に種子が土に混ざって持ち込まれた可能性が高い。花期は9月で、高さ約1mの茎の上部に多数の頭花をつける。



八丁の辻からみた福智山山頂（標高901[㍎]）。かつて最澄や空海もここで祈願したと伝えられている。

ふところ

いだ

懐に抱かれて

【父母のような福智の峰】

その姿はいつも私たちの心に刻まれている。
父のように温かく、母のように優しい福智山。
故郷・赤池の原風景をいつまでも大切にしたい。

ゆったりと流れをたたえる彦山川に、美しい稜線がゆらいでいた。深緑のラインがゆるやかに伸び、紺碧の空にますます映える。赤池町の象徴、福智山。私たちの心をうるおし、その懐のなかで、生きとし生けるものの命を育む「麗しの山」である。

北九州国定公園に指定されている福智山は、かつて修験道の聖地であった。最盛期には36もの僧坊を数えたという。山頂には福智上宮、中腹には中宮、麓には下宮神社がある。

また、福智山の支峰である鷹取山には、その昔、城が築かれていた。戦国の世でこの地は勢力争いの接点であり、豊前と筑前の境界だった。鷹取城は、永承元年（1046年）に長谷川吉武が築城し、豊前国の城として5百年以上の歴史を重ねた。そして慶長6年（1601年）、

筑前に入国した黒田長政は、鷹取城を端城のひとつに定め、母里太兵衛を城主とする。この母里太兵衛は「黒田節」のモデルとされる豪傑で、戦国大名の福島正則から名槍「日本号」を飲み取ったエピソードで知られている。頑固者の太兵衛は、富士山より福智山の方がすばらしいと言い放ち、生涯譲らなかったという。いつの時代もこの山並みは人びとを魅了してやまない。

長い歴史を経て今、福智山麓の周辺自治体は、市町村合併という大きな課題に直面している。赤池町・方城町・金田町の三町合併においては、新町の名称を「福智町」とし、この名峰の名を掲げた。

激動の中で、赤池町の未来図はどのように描かれていくのだろうか。福智山はただ静かに、見守るようにどっしりと構えている。この山に包まれながらこの町は、これまでも、これからも、ゆつくりと豊かな文化を築いていく――



写真右／博多駅前の黒田節の銅像。鷹取城主だった母里太兵衛がモデルとされている。

写真左／豊前・筑前の国境にある要衝として城が築かれていた鷹取山山頂の鷹取城跡。

文化の回廊 探訪マップ

人、自然、歴史、伝説… 郷土の文化に
まつわるものは、まだまだたくさん存在する。
「文化の回廊」の旅は、今始まったばかりだ。



▲福智山頂

▲鷹取城跡

●虎尾桜

●白糸の滝

●皿山の平石

●興国寺

●東光寺焼仏

【大塚】 鷹取城落城の際、討ち死にした人々を集めて葬ったものと伝えられている。また、応仁の乱の戦死者を埋めたものとも言われている。

【原田の道標】 原田の交差点にある道標。東 方城村香春道、西 福智村能方道、南 赤池金田道、北 興国寺白糸滝と四方の道が記されている。

【修道碑】 明治初期に地元の人たちが力を合わせて、大久保坂と千代丸坂の道路改修工事を行ったことが碑に刻まれている。

【福智上宮神社】 福智山の山頂にあり、中宮、下宮がある。福智修験の発祥地で、白鳳元年（650年）に開山したと伝えられている。

【源平桜】 福智山中腹にある桜でエドヒガンの一対。高さ 25 ㍎、樹齢 200 年と言われ、緋色と淡いピンクの「紅白」の花をつける。

【弘法岩】 「弘法の雨宿り石」とも呼ばれ、弘法大師の姿が映ったものと伝えられている。このほかにもカブト岩、ツバメ岩などの奇岩がある。

【福泉坊】 修験者の住居跡で鎌倉後期には 15 坊のまとめ役を担っていた。元寇の際には福智山頂で護摩行事を頻繁に行っていたと伝えられる。

【皿山本窯跡】 主に小笠原藩時代に焼かれた上野焼の窯跡。多種の技法や釉薬が使われているのが特徴で、上野陶史の縮図をなしている。

【童謡一路の碑】 赤池町出身の童謡作曲家・河村光陽の記念碑。名曲「かもめの水兵さん」の楽譜が刻まれている。森戸辰男文部大臣の揮毫。

【釜ノ口窯跡】 1602 年に開窯した上野焼当初の窯。41 ㍎におよぶ連房式登り窯の跡がある。純真さと力強さを備えた格式高い作風が特徴。

【観音寺城跡】 香月氏が築城した中世の城跡。出城として葉師山城、見張所として諏訪山城などがあったと伝えられている。

【孝子善作の墓】 孝行者として小倉藩 6 代藩主小笠原忠苗から表彰された善作の墓。表彰の会は寛政 7 年（1798 年）に浜の宮天満宮で行われた。

【河村光陽生誕の碑】 昭和 60 年に、河村光陽生誕 90 周年を記念して建てられた。光陽の生家の隣、福智下宮神社の境内にある。

【国境石】 豊前の国と筑前の国の境界を示した石碑。彦山川堤防沿いの県道にあり「従是東豊前国小倉領」と刻まれている。

【餓死者の碑】 享保の大飢饉での餓死者を供養した石碑。若八幡神社の境内にある。飢饉では 75 世帯で 190 人以上の死者が出たという。

【船頭の碑】 壇ノ浦で平氏が破れた際、七歳の舟で安徳天皇を山鹿城にお送りしたという伝説が残る。この地方の船頭の祖としてたたえている。

【六児像】 子どもが大好きな六面体のお兄様。小川で六児像を洗っている子どもを注意した大人が、腹痛を起こしたという逸話が残っている。

【鬼塚】 正平の昔、尊良親皇を葬ったところだと伝えられている。「往昔御塚」がなまって「鬼塚」になったという説がある。

【松岡陸平の墓】 明治時代の炭鉱で、筑豊一の納屋頭として名を馳せた松岡陸平。担い太刀、陣笠姿で馬を飛ばし、筑豊一帯の騒動を仲裁した。

【立江地藏菩薩像】 旅の僧が石炭を発見した地「坊主ヶ谷」。その僧が建てたお堂が焼失し、焼け残った本尊が光林寺に安置されている。

【佐矢の神】 ここで父と息をひきとった佐矢姫が下半身の病気を治すといわれ「珍宝神様」と呼ばれている。

◎ 特集「文化の回廊」を歩く

【参考資料】 『豊前上野興国寺』九州歴史資料館編集／赤池町史
【資料提供】 東京国立博物館／京都国立博物館／北九州市立自然史・歴史博物館
広島山福聚寺／柿衛文庫／天理大学附属天理図書館（掲載順）

文化の秋 イベント彩る！

見て、聴いて、参加した… にとっておきの
催したちが、紅葉と共にまちを彩りました。

7区のお宝に驚きの声 おらが村の文化祭

初開催となる「おらが村の文化祭」が11月13日から2日間、7区公民館で開かれました。開催のきっかけは毎月行われる区会の定例会。「7区独自の何かをやろう」と企画し、準備から運営まで全てボランティアで行われました。区内48の家庭から約400点が出展され、来場者1000人を魅了。自家製の米や野菜を使った食事やぜんざいも振る舞われました。主催者は集まった予想以上の文化性に驚きを隠せない様子でした。



↑区民手作りの文化祭は発見の連続でした

秀作がずらり勢ぞろい 町民文化祭

赤池町民文化祭が11月6日から2日間、町民会館で行われました。小学生からお年寄りまで町内のアーティストたちによる書道・絵画・写真・盆栽・俳句など1726点の作品を一堂に展示。会場では毎年好評の小笠原古流・菊谷水月さんによるお茶会や、フラワーアレンジメントの体験も行われました。町民会館は2日限りの小さな美術館に早変わり。およそ2500人が来場し、ゆっくりとした歩調で鑑賞を楽しんでいました。



↑ひとときわにぎわいをみせた体験コーナー

思いをひとつに込めて 赤池中学校文化祭

赤池中学校の文化祭が10月31日に中央研修所で行われました。今年のテーマは「めざせ！プレーメンの音楽隊」。高い目標に向け、みんなが一つになって協力するという強い思いが込められています。各クラスの合唱のほか、音楽科によるリコーダーの演奏、英語科による「スキット」とよばれる寸劇・暗唱が披露されました。ゲストに田川市在住のチェロ奏者・久井誠子さんをお迎えし、多彩なステージを楽しみました。



↑課題曲のほか生徒が選んだ自由曲を合唱

円熟のステージに酔う ふれあいコンサート

10月31日に中央研修所で「ふれあいコンサート」が開かれました。町内で音楽活動をしている文化連盟の5団体をはじめ、市場小6年生・赤池中1年生による合唱や演奏が披露されました。日ごろの練習の成果が試される緊張のステージですが、すべての団体が堂々と実力を発揮。「回を重ねるごとに魅力を増しています」との関係者の言葉どおり、およそ400人が見守る会場からは、大きな拍手が送られていました。



↑歌詞をかみしめるように歌い上げます

童謡のまち待望の歌声 童謡コンサート

10月24日に町民会館で「由紀さおり・安田祥子童謡コンサート」が開かれました。河村光陽作曲の童謡「かもめの水兵さん」をはじめ、子どもたちに人気の「となりのトトロ」など、観客のリクエスト曲を含んだ30曲が披露されました。会場の600人は、懐かしい曲の数々と美しいハーモニーにうっとりした様子。終了後には特別に握手会も行われ、ファンを喜ばせてくれました。



↑澄みわたる歌声が胸に響きました

↓ステキなハーモニーを聞かせてくれた
安田祥子さん(左) 由紀さおりさん姉妹。



↓町民文化祭の出展に向け、生きがいデイサービスでは陶芸教室で作品づくりを行いました。



↑会場でひとときわ目をひいた皆川克己さん所有のヒュウガツツジ。



↑響(ひびき)ホール室内合奏団のメンバーとして活躍する久井誠子さんのチェロ演奏。

↓特別ゲストにお迎えした「エスプレッソ」の3人。雨のしずくのように音が重なるミュージックベルが幻想的な音色を響かせました。



↓子どもたちの注目を集める正義の味方「デカレンジャーショー」



ふるさとフェア 家族連れで大にぎわい

11月7日に町民会館前広場で商工会主催の「ふるさとフェア」が行われました。32張りのテントに町内商店などの特売品が店頭に並びました。特につきたてのお餅やわたがしなど、お買い得な食料品が飛ぶように売れ、終了時間を待たずに完売。特設ステージでは子どもたちに人気のキャラクターショーも行われ、家族連れで大にぎわいをみせました。

↓人生を語った洋七さんの講演



赤池町住民福祉講座 生きているだけで面白い

11月20日に中央研修所で「住民福祉講座」が開かれました。講師はタレントの島田洋七さん。「明るい人生を生きる」と題して、祖母とすごした少年時代のエピソードをまじえ「人間の本当の幸せ」についてユーモアたっぷりに講演しました。テンポよい会話と繰り出されるギャグに450人の観客は終始笑いが絶えませんでした。

読書まつり 2004 心に響く読み聞かせ

11月20日に町民会館で「読書まつり」が開かれ、絵本を読む会「ぶらんこ」などによる絵本の読み聞かせが行われました。1か月前から練習を重ねた感情を込めた読み聞かせに、30人の参加者は惜しめない拍手を送っていました。



↑読み聞かせに挑戦した市場小6年の杉本治佳さん(左)と名嶋優さん

赤池中野球部福岡県新人野球大会出場 チームワークで快進劇を続ける

赤池中野球部が福岡県大会の出場を決めました。田川地区大会で全5試合を快勝。筑豊大会決勝戦は延長の末、3対5で惜敗しました。キャプテンの河村祐太郎くんは「筑豊大会の悔しい思いをバネに県大会で一つでも多く勝ちたい」と、意気込みを語ってくれました。



↑エースを中心に守りを生かした堅守のチームです



↑黒装束に身を包んだ演出で選手をエスコート



↑リングではK1選手をはじめ最高峰の格闘が繰り広げられました



↑1万5千人の観客が見守るなか、堂々とした型・演舞を披露

TITANS 1st トップファイターと共演

11月6日にJICプロモーション主催、赤池町後援による格闘技イベント「TITANS 1st」が北九州メディアドームで開催され、少年空手「空友会」の拳士たちと「赤池山笠会」のメンバーがアトラクションに出演しました。格闘界のトップファイターによる15試合の合間に「空友会」の拳士たちは、選手入場のエスコートをはじめ、型・組手など練習で培った技を披露しました。「赤池山笠会」は山笠を威勢よく繰り出して、統一秋祭りさながらの迫力あるパフォーマンスで満員の会場を盛り上げました。



↑軽快な囃子(はやし)の音が会場に響きました

3町合併を考える

10月31日に赤池町・金田町・方城町合併シンポジウムが方城町地域交流センターで行われました。赤池町から縄田哲也さん、長谷川浩さんがパネリストで登壇。約300人が参加するなか、合併の必要性など活発な意見が出されました。



納税強調月間

赤池町

12月は赤池町の納税強調月間です。税金や使用料などの納め忘れはありませんか？
住民税、固定資産税、国民健康保険税、軽自動車税のほか、町営住宅使用料、住宅新築資金、水道使用料、汚水使用料、学校給食費など納め忘れのないようお願いいたします。

各種手当への申請

役場住民課福祉係

児童に関する各種手当は申請がないと支給されません。該当する人は申請をお願いします。
児童扶養手当 親の離婚や父の死亡（遺族年金受給者を除く）等で父と生計を共にしていない母子世帯に手当を支給する制度です。
▼支給月額（児童1人の場合）
・全部支給 4万1千880円
・一部支給 所得額で異なります
▼児童の加算額
・2人目 5千円
・3人目以降 3千円
特別児童扶養手当 心や身体に障害がある20歳未満の児童がいる

農林業センサス

農林水産省・役場産業振興課

平成17年2月1日現在で、全国一斉に「農林業の国勢調査」といわれる「2005年農林業センサス」が実施されます。
この調査は、今後の農林業の政策に役立てるために5年ごとに実施される大切な調査です。
1月中旬から農林業を営んでいるみなさんのところに調査員がおうかがいし、調査票に農林業の経営状況などを記入していただきます。ぜひ、ご協力をお願いいたします。

公共料金の口座振替

役場税務課

10月に旧西日本銀行と旧シティ

銀行が合併し、新たに西日本シティ銀行が発足しました。それに伴い、赤池町指定金融機関であった旧西日本銀行の口座だけでなく、旧福岡シティ銀行の口座をお持ちのかたも、平成17年1月から公共料金の引落としができるようになります。
ぜひこの機会に、簡単に便利な口座振替をご利用ください。
申し込み方法
通帳・届印をお持ちのうえ赤池町役場もしくは、西日本シティ銀行金田支店で手続きをお願いします。

役場税務課課収納対策係
内線1331

好評バナナのたたき売り

町立養護老人ホーム天郷荘の敬老会が10月27日に行われました。職員による踊りやマジックなどが披露され、40人の参加者がにぎやかなステージを楽しみました。なかでもバナナのたたき売りが好評で、テンポのいい売り文句に「はいっ」と買いの手を挙げる場面が、会場の笑いを誘っていました。



年末交通安全県民運動

交通事故をなくす福岡県民運動本部

年末の交通安全県民運動では高齢者の交通事故防止を基本に次の運動を推進します。
▼夕暮れどきと夜間の交通事故を防止しよう。
▼飲酒運転を追放しよう。
▼交差点での交通事故を防止しよう。
運転者は夕暮れどきに早めのライト点灯、交差点での「イエローストップ」、飲酒を伴う会合には公共の交通機関を使うなどを心がけましょう。
期間 12月11日（土）～31日（金）

有吉前団長受章

赤池町消防団前団長の有吉敬介さん（ひまわり）が11月に瑞宝単光章を受章しました。47年間にわたる熱心な消防活動や団長として優れた指揮を執ったことが評価されました。受章おめでとうございます。



人権を語るタベ

赤池町同和問題啓発推進協議会

「人生の慶びは出会いですパートII」と題し、大分県宇目町観光大使・矢野大和さんの講演を行います。参加無料。
日時 12月9日（土）19時30分開会
会場 赤池町同和対策中央研修所
福岡県赤池町教育委員会

年末年始の救急医療

田川地区休日救急医療センター

救急の場合に限り、ご利用ください。保険証をお忘れなく。
診療日
12月31日（土）・17年1月1日（日）
1月2日（日）・1月3日（月）
内科・小児科受付時間
9時～11時30分、13時～16時30分、18時～22時30分

私の主張大会

赤池町青少年育成町民会議

町内の小中学生が日常生活で感じたことや体験したこと、日ごろ考えていることなどを発表します。参加無料。
日時 12月18日（土）14時～
会場 赤池町同和対策中央研修所
福岡県赤池町教育委員会

小児救急医療電話相談

福岡県医療指導課

年中無休で夜間の子供患者が多い19時～23時の準夜帯に、子どもの急な病気、ケガなどに関

無料法律相談会

福岡県司法書士会

する電話相談を行っています。筑豊地域の相談先は飯塚病院 ☎0948（23）8270です。

相続や遺言、不動産登記など



正確さとタイムを競う

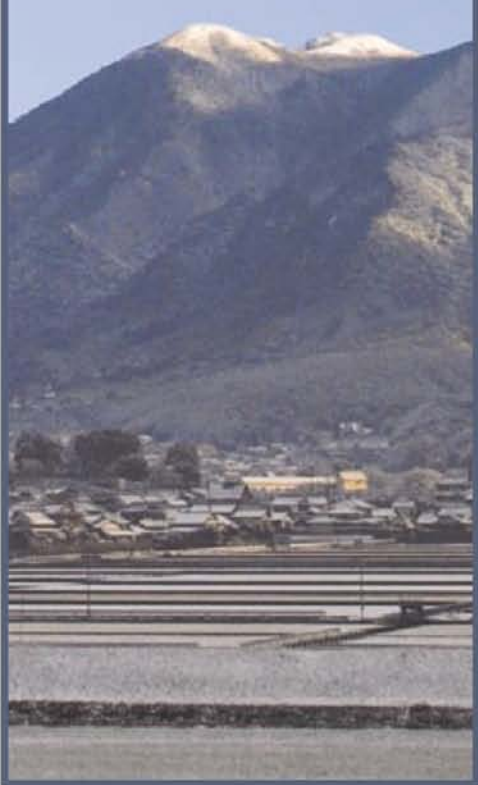
11月21日に赤池橋下河川敷で第2回目となる赤池町消防団操法大会が開かれました。火災が起きやすい冬場を前に消化技術の向上を目的としたもので、町内6つの分団が出場。的に放水するまでのタイムと正確さを競いました。大会の結果は、1位・第1分団、2位・第3分団、3位・第5分団です。

福智山の景色を楽しみながら…

12月4日から13日の10日間は「赤池町人権週間」です。一人ひとりが大切にされる町、だれもが幸せになれる町づくりを目指して「人権ふれあいウォーキング大会」を開催します。
福智山のながめのいい6コースから選んで、町の自然や人のぬくもり、ふれあいを体感してください。オープン参加も大歓迎です。

【人権ふれあいウォーキング大会】
日時：12月12日（日）9時30分開会
場所：ウィ・ウィ・ワ広場

上野の里ふれあい交流会館
内容：赤池町内の6コース（大浦・大谷・堀田・市場・中尾・赤池）を選択して歩きます。各コースの距離はおおよそ4km。閉会行事をウィ・ウィ・ワ広場で行います。終了後は「しし鍋」で温まりましょう！



あかいけ 42



陶片は語る

ここに、およそ4百年前の陶片がある。上野焼の当初を物語る「釜ノ口窯跡」から出土したかけらたち。荒々しいエネルギーを内包したその作風は、豪快でたくましく、すがすがしい。そこに、文禄・慶長の役で韓国から渡来した陶工たちの技と心を垣間見ることができる。時代の匠たちは「釜ノ口」という開窯の原点を踏まえながら、幾多の技法を生み出し、脈々と伝統を育んできた。

その窯跡から、人面を形作った陶片が見つかった。自ら

を写したのか、望郷の表

れなのか、それとも信

仰の対象なのか：

一人の陶工がここに

生きた証とも言える小

さな陶片に壮大なドラマ

を感じた。誇示すべき歴史よ

りも、厚いベールに覆われた小

さな歴史にこそ、苦悩や葛藤を乗

り越えたドラマが、秘められている。

様々な歴史をひもとくことで、郷

土の文化がそこに浮かび上がってくる。

「私たちはこの先、どのように

生きていくべきか」という問いかけ

に、一筋の光を指し示してくれる。

町の遺産を守り、町を見つめるこ

とは、町を展望することにつながる。

きつと、私たちに勇氣と自信という、

大切な糧を与えてくれるだろう。

